

空洞化する言説

井上光晴『西海原子力発電所』論

中野 和典

一

井上光晴『西海原子力発電所』は一九八六年七月と八月に「文學界」に発表された^①。この小説について河野修一郎は〈米国スリーマイル島原発の事故（一九七九年三月）以来、世界各地でこの様な事故を未然に防ぐ努力が重ねられてきたが、今年（一九八六年——引用者注）四月、ソ連チェルノブイリで発生した事故は、忘れ掛けていた恐怖を世界の人々に思い起こさせた〉と、米国に続いてソ連でも大規模な原発事故が発生したという状況を鑑みて、〈歴史の上にきっちり載って、書かれるべき時に書かれた秀れた警告の書である〉と評価した^②。確かに、この小説がチェルノブイリ原発事故の直後に発表されたことの歴史的な意義は認められる。しかし、実際に起こった原発事故自体がその恐ろしさを〈世界の人々に思い起こさせた〉のならば、壊滅的な原発事故を描かなかつた『西海原子力発電所』を単なる〈警告の書〉として評価してよいのかという疑問は残る。井上は『西海原子力発電所』執筆当時を次のように振り返っている。

創作ノートの後半は、原子炉爆発によって飛散した放射能が、仮定地域の「波戸町」と「唐津市」を被う青白い恐怖の情景を幾重にも重ねていた。

そこにはもちろんかなりの時日を要したのだが、ほぼ七割方進行していた実作の過程で、チェルノブイリ原発の衝撃的な事故に接したのである。

私のペンがまったく動かなくなつた理由と原因は理解していただけよう。可能な限りの資料を集め、想像力を振り絞つたあげく、起こり得べき未来の状況として設定した「炉心融解事故」を、チェルノブイリ原発はあっさりと乗り越えてしまつたのである。

現実を追いかける形となつた虚構は、異色の内容を持つほど燃焼すべき情熱を失う。十日過ぎ、二週間経つても手直しする気になれず、私は発表予定誌の編集部にあるままを伝えるよりなかつた。

実作が前半と後半に分載されたのはそのような事情による。つまり作の全体を修正しなければならず、特に後半の部分は準備していたものとまったく質の違うストーリーリイとなつた^③。

『西海原子力発電所』の後半に構想されていた炉心融解事故を描かなかつたのは、チェルノブイリ原発事故の衝撃力が、小説が与えるはずであつた衝撃力を〈あっさり乗り越えてしまつた〉からなのだ。井上は語っている。警告とは事故に先立つてその危険性を知らしめるがゆえに警告と呼べるのだから、チェルノブイリ原発事故の後に発表され、しかも壊滅的な原発事故を描かなかつた『西海原子力発電所』を単なる〈警告の書〉と見なすのは妥当と

は言えない。

だからといって、『西海原子力発電所』がチエルノブイリ原発事故の衝撃力に圧倒されて破滅の描写を取り下げただけの、消極的な意味しかもたない小説だとも言えない。原発事故による破滅を虚構として描き、いわばシミュレーションのような形でその危険性を知らしめることだけが、小説の機能ではないからである。

黒古一夫はこの小説に描かれる〈自由〉を奪われた原発技術者

〈原発被曝が原因で死んだ労働者の未亡人〉〈無気力な地域の人々〉〈反核劇団の役者たち〉といった原発に対して立場を異にする人々が、ひとしく〈核Ⅱ原発〉という得体の知れない存在によって支配され⁴⁾ていることに注目し、この小説を〈ヒロシマ・ナガサキ〉の被害に原点を置く従来の〈原爆文学〉とは異なる、〈核〉を世界の現実、歴史性においてとらえるグローバルな視向に支えられた〈核文学〉とでもいわなければならぬ内容を持った作品⁵⁾だと論じている。黒古の言う「核文学」とは、核の軍事利用を題材とする広義の「原爆文学」と核の「平和利用」を題材とする広義の「原発文学」を包括する概念だと考えてよい。

確かに、核の軍事利用と「平和利用」を別個のものとせず、双方のつながりを探り、人間と核エネルギーの問題として包括的にとらえ直す思考は重要なものに違いない。しかし、「核文学」という概念は、その抽象度の高さゆえに、核エネルギーをめぐる立ち位置の多様性を捨象してしまう危うさもある。たとえば、計画的戦略によって人間を殺傷する、あるいは殺傷可能性を保有して他国を牽制^{けんせい}する軍事利用と、偶発的事故によって人間の生命を脅かしてしまう「平和利用」をひとしなみに〈核権力〉と呼ぶの

は、核エネルギーの危険性ばかりを前景化して、その背後にうめく人々の思惑を見えにくくさせてしまう。『西海原子力発電所』に即して言えば、黒古の言う〈原発が〈核権力〉〉として地域を支配する構造を暴き出す⁶⁾という⁷⁾とらえ方、つまり原発と地域、支配と被支配という二項対立による⁸⁾とらえ方では、この小説に描かれている原発関係者たちや地域住民たちの立ち位置の多様性は見えてこない。これらの多様性のありようを探り、その意味を問い直す必要があるだろう。

野崎六助は〈八〇年代に市民運動のかたちで原発の思想と行動とは盛り上がったが、ミステリへの反映はわずかだった〉という状況分析をふまえて『西海原子力発電所』を〈再度、注目されてもいい〉〈原発ミステリ〉と位置づけた⁹⁾。確かに、この小説は無人炭鉱住宅における男女の謎の焼死事件の「真相」を解明することを物語の主軸にしており、原発を題材にした推理小説と見ることでもできる。しかし、それならばこの小説が推理小説の構成を持つていること自体の意味を問う必要があるだろう。なぜ『西海原子力発電所』は、原発を描くのに推理小説の手法を用いているのか、そこにどのような効果が認められるのかを検討せねばならない。

川村湊は『西海原子力発電所』の登場人物たちが〈原発で働く人間も、それに反対して反原発の芝居を上演する人間も、原発からの放射能の汚染を恐れて精神を狂わせた人間も、長崎での被曝を特権的にふりかざす人間も、新興宗教に入り込む人間も、それぞれに少しずつ平常心を失い、正気の外側へはみ出¹⁰⁾ていってしまう〉ことに注目し、それによって原発が〈人の精神を狂わせてゆ

く装置)であることを描いたのだと論じている⁶⁾。なぜ原発が(人の精神を狂わせてゆく装置)なのかという点について、川村は原発がそれを誘致することによって(過疎の貧しい地域にじゃぶじゃぶと金がつぎ込まれ、人々は正気を失って、虚栄と虚構と虚無の中で魂をすり減らしてゆく)という状況を引き起こすからだと言っている。確かに、原発が引き起こす問題の一つに、電源三法交付金などによる原発周辺地域の経済状況の急変や旧来の人間関係の崩壊があることはしばしば指摘されるところである⁷⁾。しかし、『西海原子力発電所』に描かれる(狂気)のすべてが原発に根ざすものであるとは認めがたい。特に(長崎での被曝を特権的にふりかざす)(「賈被曝者」)たちの(狂気)については、その原因を原発に求めることはできないのではないか。そもそも川村のように原発を(人の精神を狂わせてゆく装置)と呼び、原発の誘致によって(巨額の金)を得ることを(狂気の道)と呼ぶのは、一方に(正気)を対置することによってはじめて可能になることだが、その(正気)にどれほどの正当性があるのかは疑問である。原発の背景にある中央と地方、あるいは都市と過疎地の格差と相互依存関係を考えてだけでも、原発誘致という選択が一定の「理性的判断」にもとづくものであったことは認めざるをえないし、誰もがその「恩恵」に浴してきたことを考えれば、その選択を(狂気)として切り捨てる(正気)の正当性は失われてしまうのである。重要なのは原発の(狂気)の中に(正気)を探り、原発を(狂気)と見なす(正気)の中に(狂気)を探る思考であろう。

本論では、『西海原子力発電所』の登場人物の立ち位置の多様に注目し、それらの関係を探ることによって、(警告の書)と

いう評価にはとどまらない、この小説の可能性を追究したい。

二

『西海原子力発電所』の構成は、原発をめぐる物語と原発をめぐる物語を繰り返したものになっている。そして、原発を否定する言説も、原発を肯定する言説も、ともに信頼性が損なわれていることをその特徴としている。

原発をめぐる物語は水木品子を中心に展開する。水木品子は佐賀県唐津市近くにある西海原子力発電所⁸⁾で起きた放射能漏れ事故によって夫を失ったという経歴を持っていた。

西海原子力発電所で、三号原子炉の運転が開始されて間もなく、一九八八年秋に、二人の労働者が作業中被爆した。原子炉格納容器の入口付近でパイプを補修していた際、許容量をはるかに越えた放射線を浴びたのである。原子炉制御棒駆動機構の水圧系にはさまれた狭い場所であった。そのひとりが水木品子の良人だったのだ。長崎大学病院皮膚科で診断された病名は「放射線皮膚炎、二次性リンパ浮腫」。悲劇はその直後に起きた。

長崎から、当時水木夫妻の住む佐世保までの帰途、特急バスの車中で、診察を受けたばかりの三十九歳の男は、意味不明な声を発して、喚きだしたのだった。

精神科への入院から、列車への飛び込み自殺に至るまでの百日余を、水木品子は毎日欠かさず良人との面会に通ったという噂を、小出芳郎はきいていた。

水木品子の夫が遭遇したこの放射能漏れ事故が、『西海原子力発電所』に描かれる唯一の原発事故である。ただし、夫の直接的な死因は、放射線障害ではなく、列車への飛び込み自殺であるときれている。おそらく夫の自殺がその前に患った精神病に起因し、精神病がその前に遭遇した放射能漏れ事故に起因しているらしいという間接的な因果関係は認められるものの、その間接性ゆえに、果たしてどれほど原発事故が夫の死に関係しているのかということとは曖昧になっている。そのため、水木品子も完全な「原発事故の遺族」とは断言しがたい位置に立たされていることになる。このように水木品子の立ち位置は始めから曖昧さを残すものになっているのだが、それでも、この放射能漏れ事故がこの小説に描かれる唯一の原発事故であることを考えれば、水木品子は「原発事故の遺族」として原発の危険性を訴える最も有力な声を上げられたいはずの人物だったことは明らかである。

水木品子はその役割を果たすべく、「反核の旗印」(二四)を掲げる劇団有明座の唐津公演において幕間の舞台に立つ。そこで彼女は「西海原発より五百メートル程離れた海沿い」(二)の農家で奇形の猫が生まれたという話をして、原発の危険性を聴衆に訴えるのである。

チロ(親猫の名前)は自分で消えたのではなく、仔猫もろとも何処かで始末されたのだ。永年可愛がっていた飼猫が、どうしてそんな無残な仕打ちにあったのか。仔猫を生んだあと全身の毛が斑に抜け落ち、片方の目がたれたような恰好になり、チロはとも見られたぎまみではなくなっていた。

生まれた仔猫も五匹のうち三匹が全盲で、いずれも首輪の

ような赤い痣^痣ができており、とても飼う気になどなれなかつたらしい。(二)

水木品子は、親猫の変貌と仔猫の奇形の原因として、その約三ヶ月前に親猫が「原子力発電所で働く「除染作業員」の使用する」(茶褐色の手袋)(二)をくわえてきたという出来事を語る。このように猫の異変によって原発の危険性を表すという手法は、井上が『西海原子力発電所』の二年後に発表した『輸送』⁹⁾においても用いられている。ただし、『輸送』では使用済み核燃料の輸送トレーラーが海に転落するという事故によって、周辺地域に大量の放射性物質が撒き散らされ、浜に打ち上げられた魚を食べた猫たちが内部被曝によって異様な姿に変貌するさまが、物語内部で起きた出来事として描かれているのに対して、『西海原子力発電所』では水木品子による猫の挿話が、根拠のない(ねじまげた話)(出鱈目)(二)として人々に受け取られるさまが描かれているという点が異なっている。後日、水木品子が話題にした仔猫が、実際は「五匹じゃなく四匹」(二)であり、しかも「四匹ともまたもで、盲の猫なんか一匹もおらんやつた」(二)ことが町の人々によって確かめられ、彼女の主張が覆されるのである。

水木とかいう女のいう通り、雌猫の抜け毛が原発のゴム手袋に関係しているとすれば、実際どがんふうな成行になりますか。原発さんの下着や靴下を洗濯しとる下請の人間がまずもって、髪の毛を心配せねばならんやろう。……

原発に出入りしたので髪の毛が薄うなったという者がおりますか。原発で仕事をしとるひとに飲み食いさせとる食堂の皿や丼が、放射能をあびて色や形のどうとかなったという事実

がありますか。……

(二)

水木品子を（水木とかいう女）と呼び、原子力発電所を（原発さん）と呼び分けながら、彼女が訴える原発の危険性をことごとく否定しようとしているところに、（何もかもが原発に結びついてる町）（六）で暮らす人々の不快感が端的に表れている。この出来事を契機に水木品子は（子どもにまで泥を投げつけられる）（二）ような町の嫌われ者になってしまふのだが、彼女の発言は、その根柢の不正確さゆえに、町の人々の感情的な反応に対抗する説得力を持ち得ないのである。

さらに、水木品子が唐津の精神病院で治療を受けていたということが明かされることによって、彼女の訴えは大きく信頼性を損なうことになる。

「とにかく、水木品子、さんが精神病院に行ったのは事実でしょうが。あんたもそれは認めたじゃなかね」

「事実だからどうだといわれるんですね。どんな出鱈目な想像をしてもかまわんといわれるのですか。あなたはさつき、黴菌を撒散らしとる病人だつて、品子さんのことをそんなふうに決めつけられたとよ。……今年か来年のうちに西海原発で大きな事故があつて、波戸の人間は犬が猫みたいな顔になる。品子さんがそういった。だからまともじゃやない。……みんなあなたがいうたことですよ」

「西海原発で事故が起きるといふ話は、事実、そういったんですよ。有明座でもそんな話をしとつたんじゃなかとね。水木品子という者の、それが看板なんだから、否定はできませんよが」

(六)

水木品子が精神病院で、近い未来に発生する原発事故によって（波戸の人間は犬が猫みたいな顔になる）と語っていたというのは、噂の域を出ることではない。その噂をもとに水木品子（六）を（原発の町で黴菌を撒散らす病人）（六）と呼ぶのは、彼女への反感に根ざした誹謗中傷であると言える。しかし、水木品子が精神病院で治療を受けていたことは、彼女に同情的な二宮ソノ江も認めざるをえない事実として語られている。これによって水木品子の発言全体が、彼女の不安定な精神状態が生み出す、さまざまな錯誤を含んだ虚実混交の言説と見なされることになるのである。

これに加えて、水木品子が（亭主が死んで一年も経たんうちに）（男を引張り込）（二）んでいたことが、（精神科への入院から、列車への飛び込み自殺に至るまでの百日余を、水木品子は毎日欠かさず良人との面会に通つた）（二）という経歴との齟齬を来してしまい、もはや彼女が「原発事故の遺族」であることに（同情しとる者なんか誰もおらん）（二）という状況が生まれてきたことも描き込まれる。

このように原発の危険性を訴える水木品子の発言は、第一にその根柢の不正確さによって、第二に彼女自身の精神状態の不安定さによって、第三に彼女の行動の一貫性のなさによって、その信頼性が決定的に損なわれているのである。こうして水木品子が掲げる原発の「看板」は、まさに「看板」だけの、内実が空洞化した言説になってゆくのである。確かに、原発を擁護しようとする町の人々の中に、水木品子の言行を曲解し、彼女を信用ならない人物におとしめようとする心理が働いていたことは考慮せねばならないが、そのような人々による曲解だけでは説明のつかない

不正確さと不安定さと一貫性のなさを持った人物として水木品子が造形されていることは確かである。『西海原子力発電所』は、「原発事故の遺族」水木品子という、原発の危険性を訴える最も有力な声を上げられるはずの人物を登場させながら、なぜその信頼性をことごとく奪うような物語を展開しているのだろうか。

三

この問題を検討するためには、『西海原子力発電所』を構成するもう一つの物語、つまり原爆をめぐる物語について考える必要がある。この小説においては反原爆の言説も、水木品子が示す反原発の言説と対をなすように、その信頼性が損なわれているからである。

この小説において反原爆の声を上げているのは有明座の人々である。有明座は（被爆者の座長に率いられた悲劇の民衆劇）（一二）を殺し文句とする演劇集団であり、（二本立てか三本立てのうち的一本を、必ず被爆者の生活か原子力発電所を背景にした舞台）（七）にするとという方針で公演を行っている。有明座の前身は、浦上座という長崎原爆のイメージを喚起する名前の劇団であったが、劇団の方針に反対する座員と袂を分かちてからは、長崎原爆と西海原発（のモデルになっている玄海原発）の中間地点を指示しているらしい（有明座の人々の住まいも両地点のほぼ中間に位置する（伊万里市のアパート）（三）にある）有明座に名前を変えて活動を続けている。この浦上座から有明座へという劇団名の変化には、演劇の題材を（原子爆弾専門）（一二）から、原子力発電

所にまで広げてきたという劇団の来歴が端的に表れている。

座長の浦上新五（本名は木須敏行）は、長崎に原爆が投下された一九四五年八月九日、（佐世保空廠から派遣されて、大橋の兵器製作所にきていた）（一二）ときに被爆した、と長年人々に語っていたのだが、若手座員の浦上耕太郎（本名は香田哲生）からの糾弾によって、実は八月九日には長崎におらず、（救援隊の一員として長崎に派遣されたのは八月十二日）（一二）になってからのことであつたことが明らかになる。浦上新五は八月九日の三日後に被爆地に入った、いわゆる入市被爆者であつたにもかかわらず、原爆投下の当日に被爆地にいた被爆者だと偽って二二年もの間、劇団を率いてきたのである。座員たちの前で自分が偽称していたことを告白し、謝罪する浦上新五に対して、座員の有家澄子は痛烈な批判を浴びせる。

うちは少し、座長のいうことは簡単すぎるように思いますよ。弁解してすむ問題じゃなくと、そういわれましたばってん、それにしては少しあつさりしとるじゃなかですか。……兵器工場でやられた話を、うちは何べんもきかされとりますよ。……（略）うちは城山町で被爆したとばってん、なぎ倒された孟宗の竹林とか、浦上川の死体でも、座長は自分で見たこと、何時でん喋つとつたじゃなかですか（略）あとから入つた者は別にして、有明座は被爆者の劇団じゃなかったとね（略）肝心の座長がごまかしたつたなんて、うちは許せんよ（一四）

有家澄子は、有明座が（被爆者の劇団）であること、ほかならぬ被爆者自身が被爆当日のことを演じる＝再現するというところが、有明座という劇団の自己同一性であり、存在意義であつた

はずだと主張する。それゆえ、座長が原爆投下の当日に長崎にいた被爆者ではなく、その三日後に長崎へ入った入市被爆者であったこと（有家澄子に言わせれば、入市被爆者でしかなかったこと）は、ともに活動してきた有明座の座員たちとその公演を観てきた客たちに対する許しがたい裏切りだと言うのである。

このような有家澄子の非難が前提にしているのは、原爆について語る「資格」には階層があるという観念である。八月九日、（城山町で被爆した）という経歴を持つ有家澄子は、いわば「直接的な被爆者」であり、八月一二日に入市被爆した浦上新五は、いわば「間接的な被爆者」でしかない。それゆえ、有家澄子に比べて、浦上新五は原爆について語る「資格」とはぼしい。浦上新五は（救援隊であんまり無残な人間を見たものだから）（一四）と自らの体験の直接性と動機の純粹性を弁解し、他の座員も（三日後に浦上を歩いたとなら、被爆者とおなじたい。原爆手帳を貰う資格のあるとだけんね）（一四）と彼を擁護するが、有家澄子が問題にしている「資格」とは、被爆者健康手帳の交付を受ける「資格」とは別のものである。彼女に言わせれば、「間接的な被爆者」ではない浦上新五が原爆について（自分で見たこと）語ることに、つまり「直接的な被爆者」のように語ること自体に重大な問題があるのである。

なぜ「間接的な被爆者」が「直接的な被爆者」のように原爆について語ってはならないのか。この小説は、もはや入市被爆者ですらないにもかかわらず、自らを被爆者と偽称していた白坂三千代を登場させることによって、この問題を掘り下げている。白坂三千代は、浦上新五を擁護するように（いちばんの卑怯者はあた

し。今の話をきいて、駄目だと思ったの。（略）ほんこのことをいいます。亭主も騙していたんだけど、あたしも膺者なんです。広島で被爆なんかしていません）（一四）と告白する。彼女は原爆が投下されたとき、疎開していて広島にはいなかったのだが、後日（電車も木も緑もない広島町）（一四）に立ったとき、（何も無い、零みたいな運命を自分で引き受けて行こう）（一四）と決心したのだと自分が被爆者を偽称するにいたった経緯を語る。白坂三千代は有家澄子に（あたしとあなたのこと戦争に対しては、少くともおなじだと思ふのよ。（略）普通の空襲と原爆は違うといわれれば、そうかもしれないけど、残された者からいえばおなじだわ）と語り、ともに空襲で家族を失ったという意味では同じなのだから、非被爆者も被爆者と同等に原爆について語ることが許されるのではないかと彼女を説得しようとする。このように主張する白坂三千代に有家澄子はさらに痛烈な批判を浴びせる。

膺被爆者の、甘つちよるい動機なんか、ききとうもないけんね。（略）それじゃほかの者はどがんとしたとね（略）原爆のあとで、浦上や広島町を歩いた人間は何千人もおるとよ。その人たちはみんな被爆者になろうとしたとね。……零みたいな運命を引き受けたと、三千代さんは今そういうたでしょう。そういう言葉をいうたとよ。零みたいな運命を引受けたから、それでどうなったとね。ほかの被爆者がひとりでも助かったのか、うちはそれをききたか。（略）真似なんかする必要はなかとよ（略）浦上でどんげんひどか人間を見たからというて、真似なんかしよつたら、何時かわけのわからんことなってくる。そうは思わんね（一四）

ここで有家澄子は大きく二つのことを批判している。一つ目は、被爆者を偽称する行為が、どれほど強い被爆者への共感に根ざしたものであっても、その共感（浦上や広島の町を歩いた）（何千人）の人間にすら共有されず、結果的に（ほかの被爆者）の（ひとり）をも救わなかったではないかという独善性への批判である。二つ目は、被爆者を偽称する行為が、どれほど高い倫理性に根ざしたものであっても、（真似なんかしよつたら、何時かわけのわからんごととなつてくる）、つまりそれを許していたら原爆の「実相」が歪められてしまうのではないかという正当性への批判である。有家澄子は被爆者を偽称する行為には独善性が潜み、原爆の「実相」を歪める作用があると考えるがゆえに、非被爆者が被爆者のように原爆について語ってはならないと主張するのである。

これらの批判は、具体的には被爆者を偽称してきた浦上新五や白坂三千代に向けられたものだが、少し抽象化すれば、まさに「原爆文学」そのものを問題化した発言としても読める。それは大田洋子や林京子といった被爆体験を持つ作家が原爆について語る場合と、井伏鱒二や井上光晴⁽⁹⁾といった被爆体験を持たない作家が原爆について語る（むろん井伏や井上自身が被爆者を偽称しているということではなく、小説に被爆者を登場させて証言させる）場合の差異という、古く、新しい問題である。被爆体験を持たない作家が（自分で見たごと）、つまり「直接的な被爆者」のように原爆について語ることは、（何時かわけのわからんごととなつてくる）という事態、つまり原爆の「実相」を歪める事態を招いてしまうのではないか。そのようにして作られた原爆表象によつて、（ほかの被爆者がひとりでも助かったのか）、つまり読者の共感を喚

起し、被爆者を救うような状況をどれほど形成できたのか。これは、いずれ（全ての被爆者が亡くなつてしまう）という（当事者が不在の不確かな状況）⁽¹⁰⁾、つまり原爆の「実相」を証言し、その記憶の真正性を担保する人間がいなくなつてしまうという状況へと向かいつつある現在において、非被爆者が原爆について何を、どのように語りうるのかという問いにもつながる深刻な問題である。

このようにして、『西海原子力発電所』に描かれる有明座の人々の対話は、この小説を高次「原爆文学」（「原爆文学」についての「原爆文学」）へといたらせる可能性を開いているのだが、被爆者への強い共感から被爆者のように原爆について語ろうとする浦上新五らの立ち位置と、被爆者と非被爆者を原爆を語る「資格」において階層化しようとする有家澄子の立ち位置との対立それ自体は、特に新しい問題を提起しているとは言えない。『西海原子力発電所』の新しさは、そのような浦上新五らが持つていた被爆者という反原爆の声を上げる「資格」の無効化を、水木品子が持つていた「原発事故の遺族」という反原発の声を上げる「資格」の無効化と繰り合わせていることにある。では、それらを一对のものとして描くことには、どのような意味があるのだろうか。

四

『西海原子力発電所』に描かれる反原発の言説は、水木品子による発言が唯一のものではない。この小説には有明座による原発の演劇「ブルト二ウムの秋」⁽¹¹⁾が劇中劇の形で挿入されている。

この演劇は（耳からも鼻からも出血して止まらん（ことなる）（一〇）という体調異変の原因を放射能に求める⁽¹³⁾元原発労働者（浦上新五が演じている）と、（原因のわからないものを、どうして放射線に結びつけるんだね）（一一〇）とその男の主張を退けようとする原発技師（浦上耕太郎が演じている）の対話を中心に構成されている。「プルトニウムの秋」は、水木品子が語った猫の挿話と同じように、生体の異変によって原発の危険性を訴える劇なのである。

この劇中劇が挿入された上で、浦上新五らが贖被爆者であることが明かされることによって、原爆について語る「資格」をめぐる問題は、原発を語る「資格」をめぐる問題へと接続されることになる。水木品子の場合、発言の不確かさ、精神状態の不安定さ、行動の一貫性のなさによって、「原発事故の遺族」という反原発の声を上げる「資格」が無効化し、反原発の言説の空洞化を招いたのだった。では、浦上新五らが贖被爆者であったことが明かされ、被爆者という反原発の声を上げる「資格」が無効化したとき、彼らの発した反原発の言説とともに、反原発の言説までもが空洞化してしまうのだろうか。

これを検討するためには、『西海原子力発電所』の結末に置かれる鳥居美津の手紙について考える必要がある。この手紙には、浦上新五を糾弾した浦上耕太郎もまた（一歳という年齢で、長崎の大方の大人たちと同じように、悪魔の光と熱線をわれとわが身で受けてしまった）（一五）経歴などなく、四歳まで島原で育った贖被爆者であったのを鳥居美津が戸籍調査や聞き込み調査によって確かめたこと、それでもかかつて浦上耕太郎の恋人だった彼女

は彼への愛情を捨て去ることができず、彼とその新しい恋人である水木品子との関係に嫉妬して、二人を殺すつもりで水木品子の家に火を放ったこと、その結果水木品子は焼死したが、浦上耕太郎は生き残ってしまったことが綴られている。

『西海原子力発電所』には、物語の冒頭で水木品子の焼死事件をめぐる謎を提示し、結末でその謎を鳥居美津による放火殺人として解き明かすという推理小説の手法が用いられていることになる。むろん、この手法には、謎解きに参加させることによって読者を物語に引き込むという作用があるのだが、ここでより重要になるのは、結末に置かれる言説に謎を解き明かす「真相」として特権的な信頼性を付与するという作用である。つまり、この推理小説の手法によって、水木品子や浦上新五らの言説が空洞化されているのとは対照的に、謎解きの部分に当たる鳥居美津の言説が特権化され、信頼性の高いものとして読者に提示されるのである。しかも、鳥居美津は母親が妊娠中に長崎で被爆した胎内被爆者、つまり「直接的な被爆者」と呼びうる「資格」を持つ人物として造形されている。鳥居美津は嫉妬に駆られて放火殺人を犯してしまうのだが、それは浦上耕太郎が（一歳の被爆者）（一五）という（贖の通行手形を使うのを、阻止）（一五）しようとする行為でもあった。

私のしたことは何だったのか。一人の人間が被爆者でもないのでそれを看板にして生きて行く。果たしてそれが罪なのか、と問われれば私の足はすぐみまます。許せなかったのは、お前を捨てた男であって、被爆者であろうとなかろうと、関係ないではないかという声がきこえてきます。（一五）

つまり、『西海原子力発電所』に描かれる放火殺人とは、鳥居美津という「直接的な被爆者」の言説が、浦上耕太郎という贗被爆者の空洞化された反原爆の言説とともに、水木品子という「原発事故の遺族」の空洞化された反原発の言説を滅ぼそうとする（二枚の「看板」を焼き払おうとする）という言説闘争の劇として読むことができるのである。

胎内被爆者の鳥居美津が贗被爆者の浦上耕太郎を批判するという構図は、被爆者の有家澄子が贗被爆者の浦上新五を批判するという構図を反復していることになるが、両者の違いは、鳥居美津が批判にとどまらず、浦上耕太郎のふるまいを阻止すべく行動を起こしている点にある。しかし、その行動によっては、浦上耕太郎を殺すことはできなかった。鳥居美津の手紙は次のように結ばれている。

浦上耕太郎はどうして死ななかったのか。間違いだらけの筋書を一世一代の大見栄で私は演じたのです。贗の被爆者を愛した行く場所もない亡霊が。……（二五）

推理小説の手法を用いて鳥居美津という胎内被爆者の言説が特権化されているのは、「直接的な被爆者」の言説を特権化するためではない。むしろ、「直接的な被爆者」の強力な言説をもってしても、贗被爆者の言説を滅ぼすことができないということを語るためにこそ、鳥居美津の言説が特権化されているのである。

これを高次「原爆文学」の問題としてとらえなおすならば、『西海原子力発電所』は、非被爆者による原爆表象が原爆の「実相」を歪めてしまう危険性や被爆者への共感を喚起できない限界性を持っていることを見据えつつ、それでもなおそのような表象を否

定しない立ち位置を肯定していると言える。そして、この小説はそのような危険性や限界性を見据えることによって、新たな「原爆文学」の可能性をも開こうとしているのである。それは浦上耕太郎とは違い、水木品子が鳥居美津に焼き殺されてしまうことに表れている。言説闘争の次元で考えれば、水木品子が殺されてしまうのは、彼女が「原発事故の遺族」として発言していたからであるということになる。「原発事故の遺族」であるという「資格」に寄るかかって反原発を訴えるのは、被爆者であるという「資格」に寄るかかって反原爆を訴えるのと変わらない。そのような「直接的な被爆者」に「直接的な被爆者」を代入するような語り方に新たな可能性を求めるとはできないのである。それは広島・長崎原爆によって被爆者が生まれてしまったように、原発事故によって被爆者が生まれてしまうことを期待すること（そのような発言者の登場を求めること）に等しいのだから。

したがって、有明座の贗被爆者たちが演じていた反原発の劇にこそ、新たな「原爆文学」の可能性が認められるだろう。その可能性とは原爆についての語りと原発についての語りを接続しようとする点、それも被爆者や「原発事故の遺族」（あるいは原発被爆者）という「資格」に依拠せずに語ろうとすることによって生まれる可能性である。『西海原子力発電所』は、原爆と原発についての言説の空洞化を見据えつつ、その空洞化に抗する可能性のありかを描いた物語だったのである。

注

1 初版は『西海原子力発電所』（文藝春秋、一九八六・九）。その後、

柿谷浩一編『日本原発小説集』（水声社、二〇一一・一〇）に収録されている。本論における引用は初版による。引用に付す（漢数字）は章番号を表している。

- 2 河野修一郎「思想と謎解き」（『文學界』一九八六・一一）。
- 3 井上光晴「現実が小説をのりこえる―『西海原子力発電所』の創作過程から」（『文学時標』一九八六・一一）。井上は『西海原子力発電所』執筆の経緯について同様のことを「あとがき」（『輸送』文藝春秋、一九八九・一二）、インタビュー「何かが呼んでいる」（『異議あり！現代文学』河合出版、一九九一・三）などでも述べている。
- 4 黒古一夫「原爆文学論―核時代と想像力―」第二章（彩流社、一九九三・七）。ちなみに、黒古は同様の見解を『大江健三郎とこの時代の文学』第三部第三章（勉誠社、一九九七・一二）、『原爆は文学にどう描かれてきたか』第五章（八朔社、二〇〇五・八）、「狼火を上げつづけた作家―井上光晴」（『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇五・一一）等でも示している。
- 5 野崎六助「夜の放浪者たち―モダン都市小説における探偵小説未満 最終回―井上光晴『西海原子力発電所』後篇」（『ハヤカワミステリマガジン』二〇一〇・六）。
- 6 川村湊「原発と原爆―「核」の戦後精神史」第四章（河出書房新社、二〇一一・八）。
- 7 たとえば、開沼博『「フクシマ」論 原子カムラはなぜ生まれたのか』（第二章（青土社、二〇一一・六））。
- 8 西海原子力発電所のモデルが玄海原子力発電所であることは言う

までもない。インタビュー「何かが呼んでいる」（前掲）によれば（『西海原子力発電所』のモデルにした唐津の玄海原子力発電所というのは「存じのように、唐津の先にありますよね、それがまた建設中の時に僕は行きました」）。

- 9 初出は「輸送」（『文學界』一九八八・三）、「青い空 黄色い日」（同一九八八・七）、「クレパス」（同一九八八・一〇）。上記三つを第一、二、三章とする初版は「輸送」（文藝春秋、一九八九・一二）。『西海原子力発電所』と『輸送』の関係については、稿を改めて論じたい。
- 10 ちなみに井上は、インタビュー「何かが呼んでいる」（前掲）において「長崎で落下後三日目の原爆を目撃した」と、浦上新五の経歴に重なるような発言をしているが、その真偽は確認できていない。
- 11 岩崎稔他「コメント・全体討論」（『原爆文学研究』第九号、二〇一〇・一二）における岩崎稔の発言。
- 12 『西海原子力発電所』に挿入される戯曲「プルトニウムの秋」は、もともと小説とは別に発表されていたものである。初出は「プルトニウムの秋」（『潮』一九七八・一一）。初版は『戯曲集 蜘蛛たち』（潮出版社、一九七八・一一）。『日本の原爆文学』第五巻（ほるぷ出版、一九八三・八）にも収録されている。
- 13 血が止まらなくなるといふ体調の異変を放射能に結びつける表現手法は、井上が「手の家」（『文學界』一九六〇・六）でも用いているものである。詳細は、長野秀樹「井上光晴「手の家」の構造」（『原爆文学研究』第一号、二〇〇二・八）を参照。